

吉備の窯業～瓦窯を中心に～

原田悠希

はじめに

須恵器の製作技術が伝わったことにより、窯を用いた焼成により硬質な土器の生産が可能になりました。これにより吉備での窯業がスタートしました。その後は瓦や土師器などはじめ、備前焼といった今でも続く産業と発展していきました。本講座では吉備の瓦窯を中心に、どのように窯業が展開されていったか概観します。

1 吉備の窯業

古墳時代以前は縄文土器や弥生土器といった野焼きの土器・土製品を製作していました。古墳時代中期になると、朝鮮半島から須恵器の製作技法が伝わり、総社市の奥ヶ谷窯跡で須恵器生産が始まります。これが、吉備における最初の窯となりました。また、近い時期のは埴輪も窯を用いた焼成に変化していきました。古墳時代後期になると備前・備中地域を中心に須恵器生産が展開されます。7世紀になると吉備でも寺院の建造が始まり、それに伴い瓦の生産が始まりました。

古代の終わり頃、11世紀には須恵器の系譜を引く備前焼や亀山焼、勝間田焼が始まります。亀山焼と勝間田焼は近世手前頃に衰退していきませんが、備前焼は今日でも続く吉備を代表する窯業となりました。

その他にも窯で焼いた土器として瓦質土器や大原焼などがあります。日常雑器を主に製作しており、中世以降の集落では出土することがあります。また、いわゆる土師器も製作技法や焼成方法を変化させながら、現代まで使用されてきました。

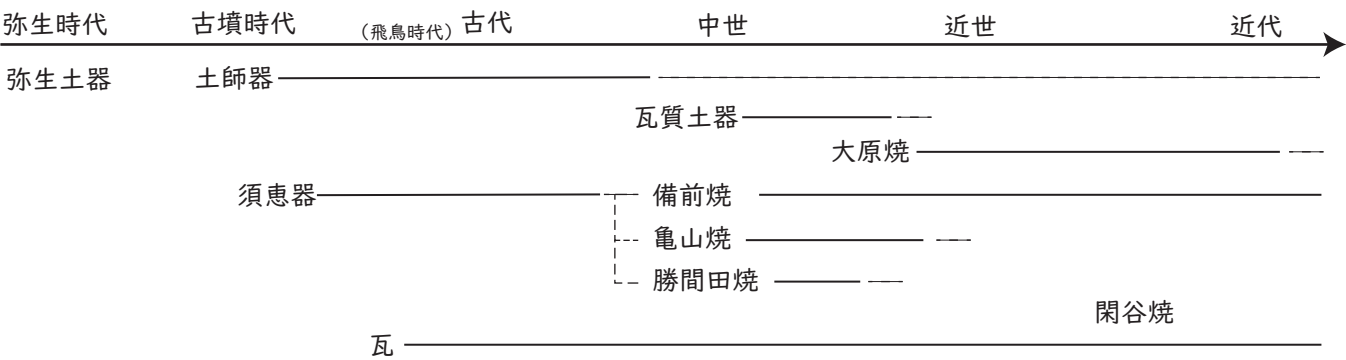


図1 吉備における窯業の消長

2 瓦窯の形態

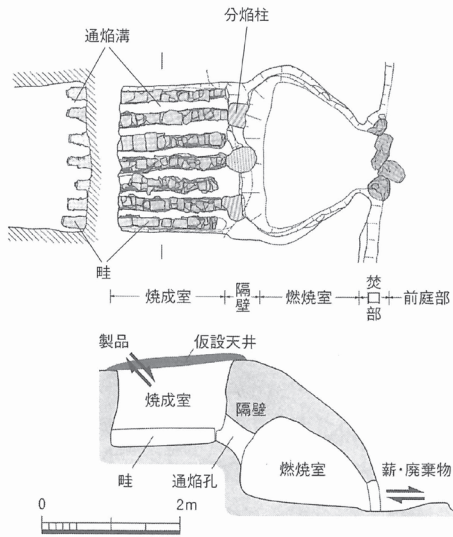
瓦窯には大きく2種類に分けることができます。それは、窖窯と平窯です。窖窯はトンネル状に窯体を構築し、全体的に傾斜しているものです。反対に平窯は床面がほぼ平坦で燃烧室と焼成室との間に高低差を付けることで火の引きを確保するような構造になります。瓦の製造方法が伝わった最初期の頃は窖窯の瓦窯のみでしたが、その後平窯も導入されました。その中でも有階有畦式平窯は瓦窯の中でも非常に長期間使用された構造です。岡山市に所在する万富東大寺瓦窯もこの形式に属します。

中世以降には達磨窯や連房式の瓦窯も出現します。県内だと浅原寺廃寺瓦窯（達磨窯：倉敷市）や閑谷焼窯跡（連房式：備前市）などが挙げられます。

表1 瓦窯形態の分類
(千葉 2024 より)

分類要素			
構築方法		構造物	
大分類	中分類	小分類	
窖窯	地下掘抜き式	有階	有段
平窯	半地下天井架構式	無階	無段
	地上窯体構築式		有畦
			無畦

【平窯】



【窖窯】

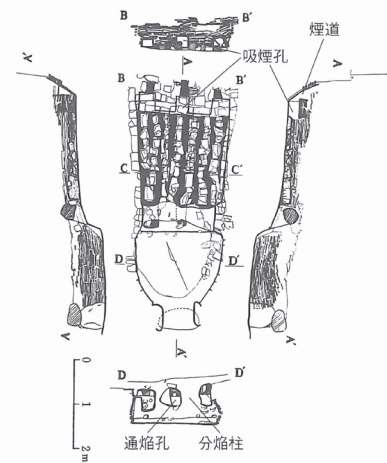
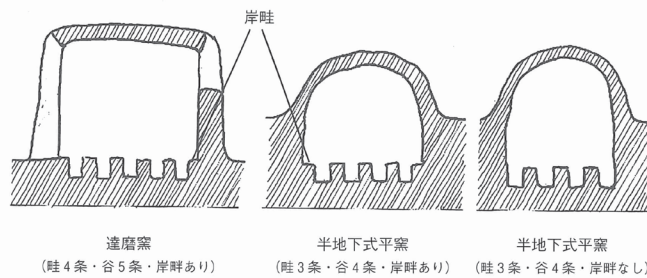
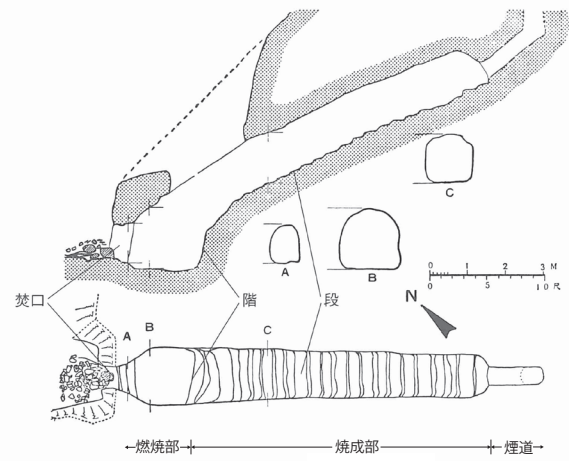


図2 瓦窯の各部名称 (千葉 2024 に加筆)



- 1 : 二子御堂奥古窯跡群
- 2 : 末ノ奥古窯跡
- 4 : 福山城址東窯
- 5 : 浅原寺廃寺瓦
- 17 : 龜山遺跡4号窯
- 20 : 山崎2号窯
- 24 : 清水廃寺瓦窯跡
- 26 : 幡多廃寺の瓦窯
- 27 : 勘定口2号窯
- 30 : 万富東大寺瓦窯跡
- 37 : 泉瓦窯跡
- 42 : 医王山東麓窯跡群2号窯
- 50 : 閑谷焼窯跡
- 51 : 閑谷学校窯
- 60 : 檜原廃寺窯跡

図2 岡山県内の瓦窯関連遺跡 (松尾 2026 に加筆)

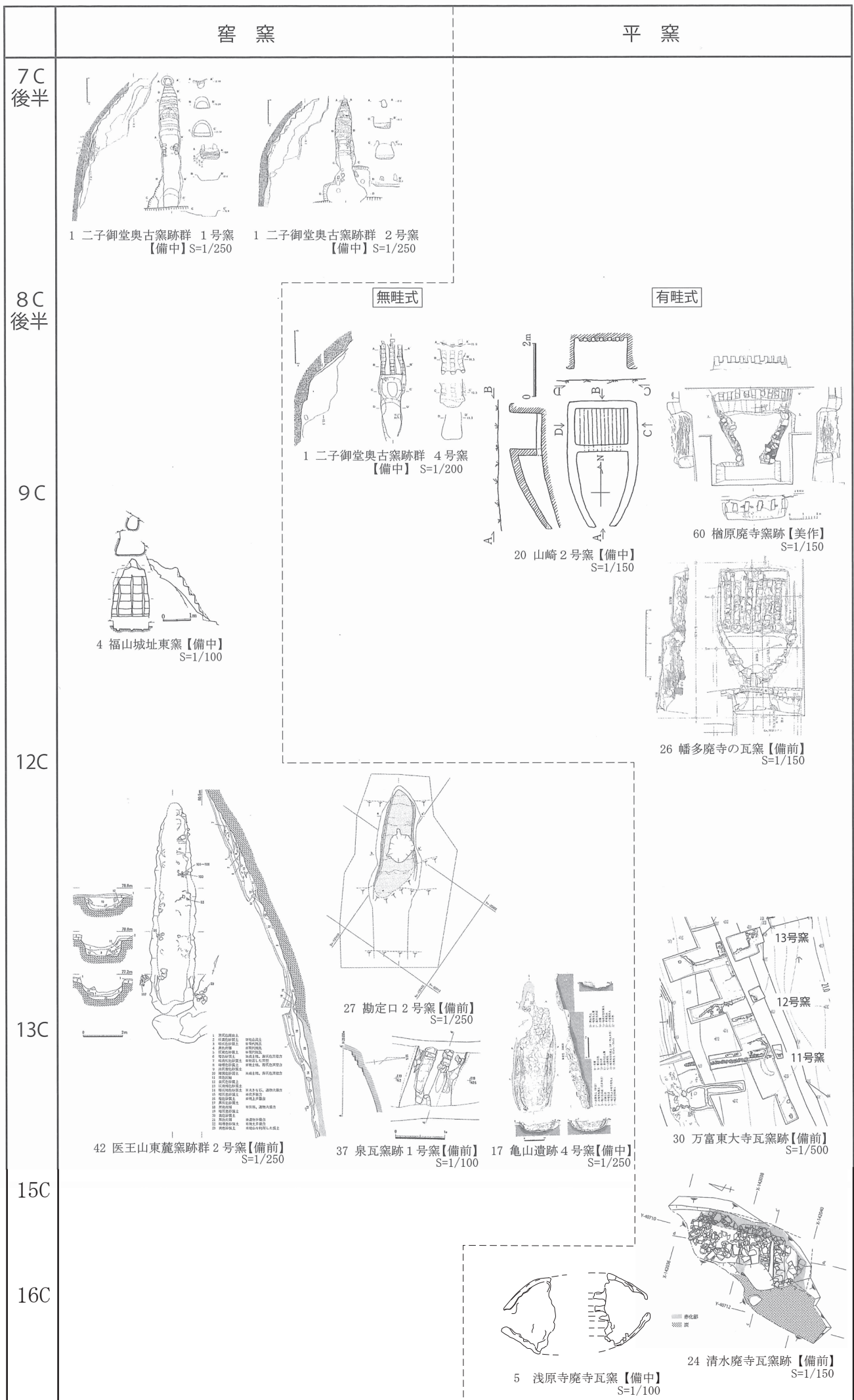


図4 瓦窯の変遷（松尾 2026 に加筆）

3 吉備の瓦窯

吉備の瓦窯は調査事例が少なく、全貌が分かるものに限るとさらに少なくなる。

瓦窯の出現：末ノ奥古窯跡 7世紀前半頃 須恵器や陶棺も焼成した瓦陶兼業窯

付近の寺院だけでなく奈良の寺院にも瓦を供給した

二子御堂奥 1・2号窯 7世紀後半から8世紀前半 有階有段式窖窯 瓦陶兼業窯

付近の寺院だけでなく8世紀には郡衙関連遺跡や駅家にも供給

平窯の出現：二子御堂奥4号窯 8世紀後半頃 半地下式の無畦式平窯

山崎2号窯 8世紀後半 半地下式の有畦式平窯 瓦のみを生産 近接する寺に供給

幡多廃寺の瓦窯 平安時代後期 幡多廃寺への供給

県内の有畦式平窯で全形がほぼ分かる貴重な例

瓦の大量生産：万富東大寺瓦窯跡 12世紀末頃から13世紀初頭 半地下式有畦式平窯

東大寺再建のための瓦窯 15基以上の窯で構成

供給範囲は東大寺だけでなく県南部各地、周防国まで

達磨窯出現：浅原寺廃寺瓦窯 16世紀前半

大永2年（1522）年の浅原寺頭塔蓮臺院毘沙門堂修築に関連する

遺構としては日本最古級の達磨窯

連房式窯出現：閑谷焼窯 17世紀末頃から18世紀初頭か

閑谷学校創建基の瓦を焼成。岡山藩主導で試験的に導入か

おわりに

吉備では比較的早い段階で瓦の製作技法が導入され、現在に至るまで連綿と続いてきました。その中でも新しい形態の導入や供給範囲の異同などの変化などがありました。特に万富東大寺瓦窯は求められた瓦の枚数に対応するため多くの窯が一度に築かれ、短期間での焼成に対応しました。吉備における実際の瓦窯の数は多いものも発掘調査事例が少ないです。実態を捉えきれない部分がありますが、時期ごとの瓦窯があることから大まかな変遷を追うことはできます。

今後、調査事例が増えることで他地域との比較や抜けていた間を埋めることができることでしょう。

参考・引用文献

岡本芳明 2016 「備前の瓦窯」『半田山地理考古』 第4号 岡山理科大学地理考古学研究室

窯跡研究会 2024 『瓦窯の構造研究』 真陽社

千葉太朗 2024 「第3節 瓦窯の基本用語整理と構造分類」『瓦窯の構造研究』 真陽社

湊哲夫・亀田修一 2006 『吉備の古代寺院』 吉備考古ライブラリィ 13 吉備人出版

松尾佳子 2026 「岡山県の瓦窯」『紀要』 第4号 岡山県古代吉備文化財センター

その他、各遺跡報告書